

ナムジュン・パイク

Nam June Paik 1932-2006 韓国／アメリカ

そのときハッキリ感じたことは、時系列が凍った空間的結晶として、「視ら」れたことである。… 幻覚で見た時系列の結晶は、「因縁の直観」に外ならなかったのであり、無意識下の深層の中でネムっていた二つの心の結び目を、えぐりだして僕の目前に見せたことであろう。 ナムジュン・パイク

ナムジュン・パイクは、TVやビデオなどのメディアを初めてアートに取り入れた「メディア・アート」の第一人者。

「キャンドルTV」(1968)は、火が灯された一本の蠟燭がからっぽのTVキャビネットの中に立てられ、映像の代わりに仄かに揺れる小さな炎を見せるという、最も単純でありながら最も美しい作品の一つ。そこから派生した「ニュー・キャンドル」(1993)は、カメラが捉えた一本の蠟燭の炎を、三原色(RGB)に分かれたプロジェクターがリアルタイムで壁面に投影する作品。投影する角度を微妙にずらすことで、三色が重なる部分では本来の色で、それ以外の場所では、蠟燭のシルエットが光の原色のみで投影される。さらに壁に投影されたろうそくを再びカメラが捉え、万華鏡のように増幅する。

僕たちはビデオ・テープを巻き戻すことができる。

でも人生の巻き戻しはできない。 ナムジュン・パイク

ナムジュン・パイクは、テクノロジーと東洋の思想を融合させ、テレビと人間、テクノロジーと自然を対立させるのではなく、両者を近づけるような作品を制作した。本展では、そのパイク哲学とユーモアをあらわすドローイング作品約60点を一堂に展示。

「輪廻」(1987)と題されたドローイングでは、人の一生をカセットテープになぞらえている。カセットテープは再生するほどに、片方にあった渦巻きがもう片方に巻かれていく。次に再生されるテープ=次の生、つまり輪廻をあらわす。過ぎ去った「過去」と未だ到来しない「未来」の間で常にあり続けるのは「現在」である。つまり「現在」こそ全てであり、今を生きる私たちの命が、過去と未来に影響を与えていることを、パイクは「フィードバック・フィードフォース」「現在→無限」と表現した。「？」のシリーズでは「？」に「？」を足すと「？」が増え、「？」を向き合わせると「ハート」に、「？」を引くと「0」となる。「幻」「無」「∞」の記号も登場し、まるで禅問答のようである。

“A Satellite”が”あさって ライト”になるのはただの言葉のモジリではない。電子音楽やビデオ・アートが大衆化されるのに20年かかったように、サテライトもあさって(明後日)にならなければ使い方も分からない筈だ。

ナムジュン・パイク

「グッド・モーニング、ミスター・オーウェル」(1984)は、1984年1月1日、ニューヨークのテレビスタジオとパリのポンピドゥー・センターをつなぎ、両局で同時発生するパフォーマンスを世界同時配信した世界初のサテライト・アート。ニューヨークではジョン・ケージやシャーロット・モーマン、アレン・ギンズバーグ、パリではヨーゼフ・ボイスがパフォーマンスを行い、ローリー・アンダーソンらポップミュージシャンも出演。本映像はその一部である。ジョージ・オーウェルは『1984年』で全体主義国家の独裁者ビッグ・ブラザーのテレスクリーンによる統治を描いたが、パイクは新しいメディアこそ全体主義的な社会からの解放という役割を果たすのだと説き、実際に世界をひとつにつないでみせることでその可能性を証明した。版画作品は、ニューヨーク側に必要な17万ドルを集めるため、パイク、ケージ、ボイス、カニングハム、ギンズバーグによりそれぞれ限定版として制作されたもので、世界中の画廊に販売された。